



感謝神経を

千歳台小学校で大事にしていることの一つに「挨拶」があります。朝の「おはようございます」から、就寝時の「おやすみなさい」まで、様々な場面に応じた「挨拶」があります。入学式に1年生にしている話も、「みんなのことを大事にしてくれる人や周りの友だちと元気な挨拶をすること」についての話です。月曜の児童朝会でも、「挨拶」をテーマに話をすることがあります。「挨拶」のことを話題とした時に取り上げるのは、「挨拶は一方通行ではなく、互いのやりとりです。」という話です。例えば、「おはよう」には「おはよう」と返します。「行ってきます」には「行ってらっしゃい」、「ただいま」には「お帰り」などと、お互いに気遣う会話となっていることがわかります。禅宗の考え方の一つには「挨拶は禅問答である」という考え方があるそうです。また、「挨拶はコミュニケーションの第一歩」とも言われます。

「ありがとう」という感謝の言葉も、挨拶の言葉の一つです。「ありがとう」を使う場面を思い浮かべてみましょう。どのくらいの場面が出てきましたか？さらに、今日一日で何回くらい「ありがとう」という言葉を使いましたか？

「ありがとう」という言葉は「有難い」と表記でき、そこから「有ることが難しい」ととらえ、「当たり前」のことではないからこそその感謝と考えられることができます。だからこそ「ありがとう」という言葉で、感謝の気持ちを相手に伝えることの意味が成り立ってくるといえます。

そこでもう一歩考えを進めて、どんな小さな好意でも、たとえ当たり前といわれることでも、感謝の気持ちを「言葉」にはっきりと出すことができる「感謝神経」(→どこかのサイトでみつけてからのお気に入りの言葉です。)を大事にしたいなど。飲食店での「いただきます」や「ごちそうさま」、買い物をした後に店員への「ありがとう」などの声掛けをする気持ちと行動が「感謝神経」だと言えます。この一言は、感謝をされた側にも好感が伝わり、気持ちよく仕事をしていただくことで、そのサービスを受ける側も有形・無形の特典を受けることも少なくありません。

学区のどこかで、毎日のように工事や作業が行われています。子ども達が安心して通行できるようにするための手立てが「感謝神経」です。誘導員や作業員の方への「ありがとうございます」「お疲れ様です。」の一言が、安全な登下校や街づくりへと繋がるのではないのでしょうか。

記名の習慣

西昇降口前には、「落とし物おきば」があります。上着などの衣服類、ハンカチ・タオル、とび縄、鉛筆などの文房具など、実に多種多彩です。共通しているのは、記名が無いことです。わが子が小学校に入学したのは、30年前ですが、算数セットに入っている道具、一つ一つに名前を付けたことを、今でもよく覚えています。持ち物への記名は、落としたり、忘れたりしたときに手元に戻ってくるようにすることが目的ですが、何より、記名をすることで、「自分の物」という、持ち物への愛着感とともに、「ものを大事にする」気持ちを育てることに繋がります。

かつて日本の社会には、瓶の利用をはじめとして、3Rと呼ばれる現代のエコ意識が、日常的に行われていました。しかし、工業技術や社会生活の変化により、大事なものとそうでないものに分かれ、その結果、特別に大事にされていないと思われるものが、西昇降口の前に集まってきている気がします。

年齢とともに、記名への抵抗感を持つのは理解した上で、自分の持ち物を大事にする気持ちを、ほんの少し心がけることが、その第一歩です。

